

# 台湾旅行と見こころ見 (一)

塩 月 佐 一

(会員・佐伯市匠南)

昨年十二月二十五日より一月三日まで、十日間台湾旅行する機会があった。

本号は珍らしく紙面に余裕ができたので、旅行の一端を思いつくまゝ書いてみたい。

希望に燃える新米教師の担任は六年義組であった。後日先輩が教えてくれたところによると、前担任が欠席が多く、放任したので手のつけようもない暴れんぼう組になり、皆担任をいやがり、新米教師に押しつけたのとこのとであった。

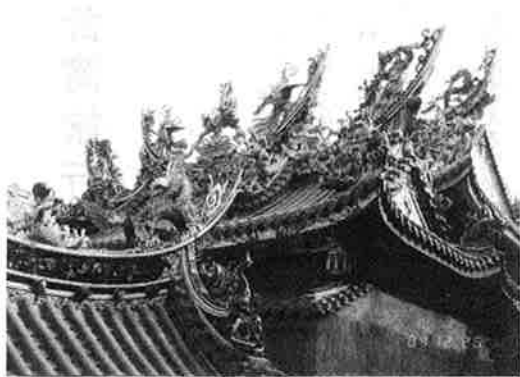
昭和十年四月、台中州大甲郡大甲街大甲公学校(現台湾省台中県大甲鎮大甲国民学校。街も鎮も日本の町にあらる)に赴任した新米教師に対する校長の措置は、教職四十年を務め上げた今日でも、なお理解しかねている。

四十八年振りに私を招待してくれたのは、この暴れんぼう組の教え子達である。製薬会社社長・木工会社社長・印刷所経営者もあれば警察署長もある。

気楽だろうからとホテルをとってくれたが、朝八時―九時になると誰かが自家用車で迎えに来てくれ、一日中案内してくれた。何か買おうとすると、すぐお金を払ってくれるので、思うように買い物もできなかった。花蓮と台北でまとまって品物を買った時は「これはお土産を買うのだから私が支払う。もし金を払ってくれるなら買わない」と前もってきびしく言って、やっとなら買ってきた。「招待したのだからサービスするのはあたりまえです。」といい「私達が今日あるのは恩師のおかげですから。」ともいう。恩師、恩師と言われる度に面は

ゆくて仕方がなかった。旅行中彼等の接待は徹底していた。どうしてこうも教師に感謝してくれるのだろうか？と何度も考えたが、日本人の私には理解できないでいる。こんな人達が、日本に来て事業をしている同級生を通じて私の住所を探し出し、今回の招待となったという。

戦後四十年、日本がすっかり変わったように、台湾もま



大甲 媽祖廟の屋根

た中華民国台湾省として日本以上に変貌

していた。

六百万人余りだった住民は千八百万人という。ほぼ同じ面積の九州は千三百万余であることを考えると、その稠密さが

思われる。そのせいか点在していた小さな田舎町が、今日では線としてすべてがつながっているのに驚いた。一筋町だった大甲も大きな町になっていて昔日の面影はすっかりなくなっていた。

宿をとってくれた飯店（旅館）は大甲の盛り場の媽祖廟近くであった。丁度お祭りで夜遅くまで大鼓・どら・暴竹にまじって、日本の歌謡曲や替歌が絶えず流れていた。騒しくて眠れましようかと心配してくれたが、旅の疲れか、床に入るとすぐ眠ってしまった。

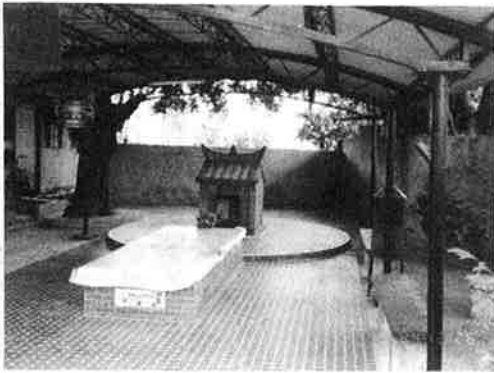
近郷近在の信仰を集めている媽祖廟は立派に改築されて、見違えるように立派になっていた。彫刻は渡来人（中国大陆から来た人をこう言っている）の作とのことだが、柱・天井・屋根どこも彫刻づくめである。礼拝堂は人人人で線香の煙がもうもうと立ちこめていた。

廟の別室では華道展が開かれていた。出品数の多いことは華道の盛んなことを物語っているようだ。お師匠さんは三十歳ぐらいの婦人であった。話しかけてみると日本語が上手である。若い人は殆ど日本語を話せないのので、興味をおぼえて話してみると、日本に留学して免許を受

けて来たとのこと、出品者も大甲鎮（町）の人々であること、まだ三年しかたっていないことなどを話してくれた。素人の私だが「よく出来ている。」という喜んでた。

書道展も開かれていて、観賞していると急に後から声をかけられた。はっきりした日本語で

「塩月先生ではありませんか」



土地公にある校内は今

と。びっくりして振り返ると、杖をついてよぼよぼした老人と青年が立っている。不振顔な私を見て

「私は王中元です。日南で先生に教えてもらいました」との言葉

に私はすぐ思い出した。この人は日南公学校で五・六年と二年間担任し、人物も成績もよかった子である。

「ああ、王中元君ね、奇遇ですね。どうしてわかったのですか」

「受付の名前で先生が来ていることを知りました」それから病気で体がこうなったことなどいろいろと身の上話をして、別れに宿を教えた。大甲滞在の最後の夜、土産を持って宿に尋ねて来てくれた。

盆栽展でも知人に会った。

蔣政権は台湾の人々の宗教を大事にしている。神社信仰を押しつけた日本統治時代と正反対である。

媽祖廟の改築もその一端であるが、各地に大きな廟を建立しているのが車上からでも見える。私が勤務していた日南校を訪問した時も途中に立派な廟があり、知人が廟守をしていた。学校の通用門横の榕樹の下に「土地公」をまつる小さな祠があったが、ここも大変立派になっていた。台湾では小さな村落毎に「土地公」といわれる福德正神をまつる小さな祠があり、何かと礼拝を欠かさない。旅行中知人をたずねるついでに、私の住んでいた官舎

を訪ねたが、三軒とも人が住んでいてほっとした。遠慮して外観を見ただけだが、植木が違っているだけだった。

小・中学校（日本とは学制が違う）が義務教育になったこと（日本時代は自由就学）人口増で、どこも三倍―四倍の学級数になっていた。

教え子達はしきりに「今日の教育はだめだ。日本の教育はよかった」



門の廟

激な学級増加で教師や教室が不足し、ために質の低下を招いたのである。六・三制発足当時の日本の姿や、今日の教育問題を思ったりした。

旅行中あちこちで〇〇工業団地という看板を見たが、日南にも工業団地が造成中とのことで見学した。政府の直営事業で、四十歳未満の者に限るといふ制限があるが地価が安く低利融資をうけられるとのことで白棟樑君（案内者）も息子名義で第二工場を建設中であった。二千坪の土地に建物が八割方できていた。団地は千五百坪―二千坪で三十区画あるという。

台湾には大工場はまだ少ないが、こんな工業団地は各地にあり、日本に追いつけ追い越せを目標にしているという。ここにも活気にあふれる台湾の姿があった。

しかし、日本の工業製品の優秀さはやはり羨望のまゝであった。家庭電気製品・カメラ・時計・自動車・オートバイは言うに及ばず、化粧品・薬品・カラオケまですべて日本品がよいと言っていた。

歌謡曲もすべてと言ってよい程日本の曲で、はじめに中国語の替え歌があり、後に日本語の歌が入っていたがいわゆる海賊版でテープの質が悪くすぐ雑音が出るようになり、日本製のものが喜ばれるとのことだった。それにしてどこに行っても日本の歌謡曲だったのには驚いた。

た。

人口六十万を越す大都市に膨れ上った台中市で、たま朝の出勤風景に出会ったがオートバイの洪水であった。若者はほとんどオートバイで二人乗りアベックも多く、信号が青に変わるや否やブーとふかせて爆進する様は日本の暴走族を思い起こさせる。街には「ヤマハ」「ス



梨山の梨・桃畑

ズキ」などの  
広告が目立つ。  
ホンダは合弁  
の現地会社があるのだろう  
羽のマークの店も多かった。  
ある人に台湾の印象を聞かれた時「道路もよく整備されているし活気にあふれ

ている」というと欠点はと聞かれた。「気がつかないが」というと「交通道德がなっていないでしょう」という。控え目に「そう言えばそうですね。もっと自動車がふえればよくなるのでは」と言う。「だめでしょうね」と言った。

たしかに交通道德は悪い。地方の町に行くとき信号機も少ないが、あっても無視して飛ばせる。危険で恐ろしい光景である。取り締っても駄目でしょうという言葉に感情の相違を感じた。

名ある観光地はどこも開発され、日本同様に俗化していた。休日ともなればどっと押し寄せるといふ。有数の観光地日月潭に行った。学生時代に聴いた粗朴な蕃婦の杵唄（蕃婦数人が湖畔の石を長短の手杵でつくつと妙なる音がでる。それに合わせて唄う）を聴けると期待していたが、厚化粧をして着飾った蕃婦が多く、観光客相手に演ずる杵唄はとても聴く気にはなれなかった。

東西横貫道路は雪山（次高山三九三一m）をはじめ、日本時代と名称の変らない南湖大山（三七五七m）<sup>ヒキ</sup>奇萊主山（三六〇五m）合観山（三四一六m）等々、三千m

以上の山々が重畳と肩を並べる間を横切り、大理石の大峡谷タロコ峽を通り花蓮に至る一九三・八kmの道路である。

よくもこんな道路を開削したものだと思う大土木工事であるが、大陸から渡来した老兵達を動員して開いたという。犠牲者も多く出たことだろうがすばらしいの一語につきる道路である。



く 湧 雲

梨山（一九四五m）は天祥と並ぶ横貫道路の二大休息所で、夏の平均気温15℃〜20℃といひ豪華な中国宮殿風のホテルがある。退役軍人団が経営しているといふが、もとは

蒋介石總統の別荘であったという。

たくさんのお観光車バス・乗用車が駐車し、観光客でごった返している。展望台からの眺望は全くすばらしい。

なだらかな山々は見渡す限り梨・桃の木でおおわれ、梨山の名称もここから来たという。高砂族により良質の梨・水蜜桃が栽培されている。高山に住んでいる高砂族（昔は高山蕃と言った）にはうってつけの仕事であろう。梨



なる と海雲ち忽

畑の彼方に冠雪した山々が眺められる。ここから道はいよいよすばらしくなる。峨々としてそびえる山並を抜けると千仞の峽谷が開ける。白雲が一片わき起ったかと思うと、

見る見るうちに雲海となり、シャッターを切ると間もなく雲霧消散する。と、また雲がわき起こったかと思うと見る間に雲海となり忽にして消散する。千古の老大樹から雨かと思われる雲の雫が落ちてくる。まさに「仙境を行く」としか私の幼稚な筆では書き現せない。

天祥は台中方面から来るとタロコ峽谷の入口であるが



断崖の大理石の峽タロコ

花蓮方面から来ると終点である。ここも梨山と同様車と人でごった返している。タロコ峽観光だけなら花蓮から入る方が近い。目もくらむような大理石の大断崖、二百mもある大

理石の一枚岩の断崖、岩をかむ激流、仰ぎ見て恐怖感におそれ、その雄大さに嘆息する。魚眼レンズでなければ全容は撮れない。写真はあきらめて、せめてもと絵葉書を買う。徒歩見物は二・三百mにすぎないが、大理石断崖は四〇kmも曲折して続く。大自然の偉大さをしみじみ思う。

五十余年前の学生時代に、花蓮港庁の警部を父にもつ友人に誘われ、四名で五日間のタロコ探勝をしたことを思い出した。警部補つきっきりの豪華な探勝だった。(蕃地は警察の管轄だった)一人しか通れない断崖の道、



峽谷のタロコ

千仞の谷に架かる鉄線橋は二人並んでは通れずゆらゆらゆれて下を見ることもできず、針金につかまりおそるおそる渡ったが、警部補はサーベルを肩にスタスタと歩いて渡った。幾つかかかっていたあの鉄線橋はもう見かけなかった。

### 三十一里の臨海道路

バスの眺めは世界にまれよ

ちよいと寄り道あのタロコ峽

砂金埋まる宝の山よ



蘇花道路

### 新興花蓮港有望ね

新興花蓮港有望ね（花蓮は花蓮港と言っていた）

日本時代の花蓮港小唄である。短い冬休みには花蓮港のおじを尋ね、友達に誘われ、何度かバスで往復した蘇澳・花蓮間の蘇花道路を、今度は乗用車で走った。この道は五十年前とあまり変わらず、懐しい記憶のよみがえる道路だった。大理石の大断崖をくり抜いて造られたこの道は、あまり変りようがないのだろう。太平洋の荒波が眼下に打ち寄せる断崖絶壁を這いつくばって走るとこの臨海道路は、タロコ峽谷と違ったまた雄大な趣きがある。驚いたことにここに鉄道が開通している。ここも大陸から来た老兵が開いたという。海に落ちる大断崖の連続するこの海岸を走る鉄道はどんな鉄道だろうか？

（未完）